

第5回徳島県総合教育会議 議事録

日時：平成27年11月10日（火）13:00～14:30

場所：徳島県庁 3階 特別会議室

1 開会

（司会進行）

＜七條政策創造部長＞

本日は、お忙しいところ、御出席いただきありがとうございます。

ただいまから、平成27年度第5回総合教育会議を開催させていただきます。

本日御出席いただいている皆様につきましては、名簿・配席表の通りでございますので、よろしくをお願いします。

それでは早速議事に移らせていただきます。議事については、飯泉知事に進行をお願いしております。マイクにつきましては、ご発言の際にスイッチを押してご発言いただけますようよろしくおねがいします。

それでは、飯泉知事よろしくをお願いします。

2 議事

（進行）

＜飯泉知事＞

まずは、松重委員長さんをはじめ、大変お忙しい中、御出席いただきありがとうございます。

今回は、9月24日に開催しました第4回の総合教育会議、そのときに教育大綱の骨子案を作成し、ご提供させていただいたところでもあります。各委員の皆様からは、多くのご意見をいただいたところでもありますし、特に地域の中核として、学校の役割、まさに、人の集う場所なんだと、地域の皆様と一緒にいかに子どもを育てていくかといった点、あるいは、教育に携わっている人達に対して、まさに行動指針となる大綱の策定が必要なのではないか。様々なご提言、特に大綱策定に向けて前向きなご意見をいただいた所でもあります。本当にありがとうございました。ということで、前回頂いたご意見を斟酌させていただき、今回は大綱の案をお示しさせて頂きたいと考えておりますので、是非この大綱の案についても様々なご意見を賜りまして、これを具現化していく大綱案としていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくおねがいいたします。

それでは、早速、次第のとおり議事を進めていきたいと思っております。

内容について、事務局からご説明をお願いします。

徳島教育大綱（案）について

（事務局説明）

＜梅田総合政策課長＞

それでは、お手元にご配付の資料、徳島教育大綱(案)をご覧ください。

9月24日に開催いたしました。第4回総合教育会議の御議論、地方創生“拳県一致”協議会や総合計画審議会若者クリエイト部会委員の皆様のご意見、9月議会の御論議を踏まえ、大綱案を作成しましたので、その内容についてご説明いたします。

1 ページをご覧ください。大綱の趣旨につきましては、9月24日の骨子案において、(括弧書きの所ありますけど)、教育の在り方、喫緊の課題と処方箋、教育行政の推進の方向性として整理しておりましたが、喫緊の課題と処方箋について、再検討すべきとのご意見をいただきまして、「取り組むべき課題」と記載を改めております。また、「取り組むべき課題」の最終行につきましては、骨子案における効果的、効率的な実施に取り組むことが重要であるとの記載につきまして、「人づくりに効率的なことはない」とのご意見を受けまして、効果的な実施に取り組むことが重要であるとしております。

2 ページをお開きください。基本方針の「とくしまの未来を切り拓く夢あふれる人財の育成」について、もう少し詳しく記載した方がいいのではないかとのご意見を受けまして、その上段の部分でございますが、補足説明として記載することとしました。

3 ページをご覧ください。基本方針に掲げる人財を育成するために、四角で囲んでおります3つの重点項目を定め、その取組の方向性を明確化するため、取組方針として、それぞれ、①から③に整理しまして、知事部局と教育委員会が連携協力する取組み、徳島ならではの独自性が表れた全国モデルとなるような取組み、社会情勢の変化により、新たに対応すべき取組を中心として、わかりやすくするため、両かっこの見出しをつけて内容を記載しております。

まず、重点項目1、地方創生から日本創成へ徳島ならではの教育の推進では、①個性可能性を最大限に伸ばす教育の推進として、リーディングハイスクールをはじめとする、多様で特色ある個性能力を伸ばす教育の推進、発達障害者総合支援ゾーンを中心とした徳島モデルの推進など、障がいによる困難を克服し、個性輝く自立を支援、小中高校それぞれの発達段階に応じた次代を生き抜くキャリア教育の推進について記載をしております。

4 ページをお開きください。②人口減少社会に挑戦する徳島モデルの学校づくりとして、チェーンスクール、パッケージスクールに代表される徳島発の小中一貫教育の推進、テレビ会議システムやタブレット端末の活用など、全国屈指の光ブロードバンド環境を活用した教育の推進、デュアルスクールの創設を目指す、二地域居住を加速する学校間移動の実現について記載しております。

①災害を迎え撃つ防災教育の推進については、幼児期から発達段階に応じた防災知識の普及啓発の推進、県立学校の避難所としての機能強化をはじめとする学校を核とした地域防災力の向上、高校生の防災士資格の取得、快適避難所運営リーダーの養成など、地域防災を担う人財の育成について記載しております。

5 ページをご覧ください。重点項目Ⅱ 一人ひとりが輝くとくしまの未来を育む教育の推進では、①確かな学力、豊かな心、健やかな体の育成として、学力向上徹底プロジェクト、元気なあわっ子憲章など知・徳・体が一体となった成長を支援、認定こども園の設置の促進や保育教諭、幼稚園教諭、保育士に対する研修の充実など、質の高い幼児教育の推進、中学生・高校生など若い世代に対するライフプランの意識付けをはじめとする生命・絆の大切さに関する教育の推進、いじめの目を敏感に察知し、絶対いじめを許さない学校づくりを進める子どもたちの健全な生活守り抜く環境づくり。

次のページ6 ページをご覧ください。

生き生きとみんなが輝く学校づくりを進める未来を拓く教職員の育成、ICTによる業務改善や社会の変化に適切に対応した経営感覚、コスト意識の醸成を図る教職員の負担軽減と経営感覚の醸成について記載しております。②学校・家庭・地域が協働で取り組む教育の推進では、学校と家庭・地域との連携体制を構築する地域総ぐるみの子育ての実現、学校をプラットフォームとして福祉関係機関との連携をはじめとするすべての子どもに均等な教育機会の提供、家庭や地域と連携した体験活動、交流など多様な機会を通じた豊かな心の育成、家庭教育に対する情報提供や相談体制の充実。

7ページをご覧ください。まなびーや徳島をはじめ、徳島ならではの学習機会を提供する生涯にわたって学び続ける環境づくりについて記載をしております。③時代の潮流を見据えた学びの推進においては、選挙権年齢が18歳に引き下げられたことによる将来を担う若者に対する主権者教育の充実、高校生が発進するエシカル消費教育の実践など、全国モデルとなる消費者教育の推進、未来のエネルギーである自然エネルギーと水素の普及促進をはじめとする未来へつなぐ環境教育の推進、ものづくり産業や六次産業化の人財を育成する新たな成長産業を生み出す教育の推進について記載しております。

8ページをご覧ください。

重点項目Ⅲ グローバル社会で活躍 徳島から世界への扉を開く教育の推進については、①徳島を愛す心の育成と「とくしま回帰」の促進として、次代のあわ文化の担い手である「あわっ子文化大使」の育成や高等教育機関と連携した地域連携フィールドワーク講座の開講など、郷土愛を育む教育の推進、県内外の大学サテライトオフィスの誘致をはじめとする大学と地域の連携による「知のフィールド」の拡大、とくしま若者未来夢づくりセンターの活動を通じた若者による未来志向の政策提案、奨学金返還支援制度の創設や県内企業のインターンシップの拡充など、「とくしま回帰」の促進、地域の誇りや愛着を育む世界遺産登録への挑戦について記載しております。

9ページをご覧ください。

②世界に羽ばたくグローバル人財の育成においては、Tokushima英語村プロジェクトや徳島ウインターキャンプなど本県独自の取組みによる徳島発、世界を体感できる環境づくり、とくしま科学技術アカデミー創設をはじめとする科学の魅力を実感し、世界に挑戦について記載しております。③国際舞台で躍動するアスリート、アーティストの育成については、2020年東京オリンピック・パラリンピックを目指し、世界で活躍する「スポーツ王国徳島」づくり、世界へ羽ばたく創造豊かなアーティストを育成する世界に輝く「あわ文化」の創造・発信について記載をしております。

大綱案の説明については以上でございます。よろしく申し上げます。

<飯泉知事>

はい、ありがとうございました。

それでは、ここからは、教育委員の皆様からご発言をいただきたいと思っておりますので、また、三牧委員さんから、田村委員さん、西委員さん、佐野教育長さん、そして松重委員長さんのの順でお願いします。それでは、三牧委員さんよろしく申し上げます。

<三牧委員>

骨子のところで、いろいろと申し上げましたが、この大綱案はとてもよくまとまっていると思います。何のためにこの教育大綱を作っているのかということが、県民のどなたが見てもよくわかる

内容になっています。担当の方から、この項目についてはこの課と、教育委員会と担当する課の名前が入っている補足の資料を見せていただきましたが、良かったなと思いました。どうしてかという、先日、四国の教育委員の会でも話題になりましたけども、学校の現場では教職員の多忙化、地域の教育力の低下による学校と地域とがうまくマッチングしていないような状況、それに対応して教職員が非常に負担感を持っているという状況があります。学校の先生方がこの教育大綱を見て「自分たちだけが頑張っているんじゃないんだ」、「県を挙げて、みんなで良い教育を作り上げていこう、未来に羽ばたく子どもたちを育てていこう」という姿勢が県にあるんだ」ということを感じ取っていただけたら、学校現場の先生方もとても力強い思いがしますし、もっともっと頑張っていこうという気持ちにもなることでしょうか。そして、教育の成果がどんどん上がっていくのではないかと思います。県民も、徳島県は本当に「人財」という言葉に表れているように人を大切に、これからの未来を築いていく子どもたちを育てていこうとしているんだということが理解できて、とても良いのではないかと、そんなふうに思いました。

先日、富山市の教育長さんと北陸3県の学力について話をする機会がありました。すると、「先生、学力が高いと言われるけれども、本当は学力だけではもちろんないんですよ。「総合力」なんですよ。」ということでした。いろいろな調査をしているけれども、北陸3県なべて言えば、例えば持ち家率が高いとか、ひとり親家庭の率が低いとか、経済の問題、それから、例えば3世代家族、大きな家族で生活している率が高い、そこにはやはり人と人との繋がりもあるし、家族間の会話もとても多いと、それから読書量も多い、そういったことから来る地域の繋がりが深く、また、その点から来る教育力も比較的高い、といったふうな様々な条件が学力に良い影響を与えているんだと。何か特別なことをやっている訳ではないのだけれども、そういった総合的な力が子どもたちの学力を押し上げてくれているのではないかと、そんなふうに話をしたのですが、まさにそのとおりだなと思いました。さきほど申し上げましたが、県挙げて教育に対して取り組んでいこうという姿勢、こういった姿勢は、まさに「総合力」をつけるということだと思います。

それからまた、教職員の意識や資質向上の課題について、先日、ある学校を参観させていただきました。その学校は、今年度、教職員のメンバーがずいぶん替わりまして、若い教員が増えたそうです。そこに、良い意味での競争心が生まれ、お互いに切磋琢磨しながら学んでいこうという姿勢が学校全体の教職員の間にも生まれてきた。学年主任の先生も、若い人が増えると、自分もしっかり勉強して若い人を指導していかなければならないということで、学校全体で職員の意識が変わってきて活気づいてきたということでした。そういったことで、学校全体がずいぶん落ち着いて、頑張っていました。また、一つの研修の例として「ホールケーキの会」というのを校長先生が提唱されて、月1回かそのくらいだと思うのですが、研修に参加したい人だけが集まって、人数に応じて等分されたケーキを頂きながら、具体的なテーマを決め、ピンポイントで研修を深めていくという方法でされています。富山でも同様の研修会で成果を上げているという話を聞きました。まさに、教師の意識や資質向上の課題であろうと思います。この教育大綱を見て教職員のやる気や方向性が確信できることを願っています。

最後に、6ページの「学校・家庭・地域が協働で取り組む教育の推進」といったところに、コミュニティスクールの考え方を少し折り込んでいただけると、ここに書いてある内容の意図がもっと明確な形で、コミュニティスクールという一つの象徴的な言葉で出てくるのではないかなというふうに思いました。

<飯泉知事>

三牧委員からは、教育委員会、現場、知事部局も含めて総力でこれを取り組み、それが現場の先生にも救いにもなるし、希望も持てる。特に6ページの所、家庭・学校・教育でコミュニティースクールにもふれていったらどうかということで、そういった点も斟酌して深みを持たせられればと思います。

それでは、田村委員さんお願いします。

<田村委員>

ご苦勞様でございます。すばらしい大綱が出来上がっているなあと思います。先日の10月30日に四国4県教育委員意見交換会があったときにも大綱の状況の話がありましたが、他県で出来上がったものが提示されていきました。それを見たときに徳島県の大綱とはちょっと違うなど。徳島県はずいぶん内容が濃いなあと思いました。会議の開催回数の話もあったのですが、徳島は今4回、まだ何回開かれるか分かりませんと答えておきました。知事さんをリーダーとして、挙県一致で大綱を策定しているのは、なかなか他県では考えられないのかなあと思って帰ってきました。他の県からは羨ましいと言われ、徳島県の教育に対する考え方を自負しました。

この大綱を見せていただいて、ますます充実しており、教育は本当に大変だなあって実感します。これをいかに組織横断的に連携していき、県民にもこれに参画できるような形をどのようにつくるのか、なかなか私にはイメージができません。「このような形で、大綱で決めたことがイメージしていけるんだよ。」というものを文章だけじゃなくて目に見える形で一覧的に提示してくれると、「あ、そうか、このように県全体が地方創生を軸に教育改革を行い、新しい未来を見据えた子どもへの教育に実際に影響を与えていくのだな。」というのが分かります。そうすると教育改革も非常に取り組みやすいのではないかと思います。現場にいる人間には非常に努力が必要になりますが、それを苦勞だと思わないで、楽しくそれができたらいいなど。さっき三牧委員さんがおっしゃいましたけど、四国4県教育委員の会議で教職員の多忙化が議題になりまして、どこの県も教員の皆さんは大変なんですね。どういうふうに多忙化多忙感を弱めていくかというので議論になりました。結局結論は出なかったんですけど、教員は子どもと向き合っている時間は多忙感を感じていないという感じがありました。なので、そこのところを皆さんで考えていって、より教員が子どもに向かえる時間を多くしながら事務的処理をしていかなければいけないなあと思いました。

3ページの「次代を生きるキャリア教育の推進」のところなんですけど、よく小学生、中学生のお母さんから「今は職業の幅が広いのに、職業体験はもっと違うところに行けないんですか。」と聞きます。私もよく思うんですが、職業体験が画一化しているというか、決まってしまっているんじゃないですか。職業って、今、若者が起業したり多様化しています。何年か前には想像もできなかった職業が隆々としているところがあり、そういう新しい画期的な企業で子どもたちが職業体験できるようになれば、働くことが楽しいと感じると思うし、体験の形を工夫していかないと意味がないと思いました。

あと、4ページの「②人口減少社会に挑戦する「徳島モデル」の学校づくり」の中に「学校間移動」というのがありますね。これは地方と都会を交流させて徳島の魅力を感じてもらい、どんどん人に来てもらおうということなんですけど、地方と都会だけの枠ではなく、徳島県だけを見ても、子どもたちがそれぞれの地域の魅力を知り、徳島発見につながると思う。現実にも今、松茂の長原の喜来幼稚園と上勝の彩保育園の子どもたちが交流をしてるんですね。山の子が海へ来て、海でいろ

んなことを学ぶ。また、海の子が山へ行って様々な体験を、子どもたちと交流しながら人間力を学ぶと。それを1年に何度かやってるんですが、そういうことをすることによって地域の違いも分かります。子どもの育つ地域でそれぞれの個性があるので、交流っていうのは非常に有効なんですね。生活を重視して学んでいる幼稚園や保育園だからこのような交流が簡単にできますが、小学校とか中学校に行ってもカリキュラムの中でそのようなことができるようになれば、子どもの思考の幅が広がり、教室を離れてできる授業になれば、子どもたちも面白いので食いつきやすいし、興味がたくさん湧いてくるのかなと思いました。だから、ここの項目の枠組み中の問題ではないんですけど、そういうことも考えてみてほしいと思いました。

あとは、子どもが小さいときに将来が決まってしまうのが良いのか悪いのかというところもあるんですけど、早めに将来を見据えた環境を子どもたちにつくってあげないといけないと思います。私は、小学時代のすごく柔軟に対応でき、いろんな意見を先生に向かって言えるという時期に、専科の先生が子どもたちを教えてほしいと思います。英語とか理科とか音楽、体育は既にあるのかなと思うんですが、教科全部を専科の先生が教えてくれたら、子どもってとても幸せだと思うんです。専科の先生は教え方が違うと思うんです。一人の先生が全ての科目を教えるのは絶対無理なので、早めに専門の先生が子どもを教えて、子どもの物事に対する興味関心を無限に拓かせてやりたいと思いました。

毎回毎回会議のたびに、どんどん項目が増えていって大変だなと思うんですが、是非これを実現していく方向に、県民が「私も子どもの教育に関わっていかなあかんのやな。」って思えるようなメッセージですかね、そういうことを早めに打ち出していって、県民がわくわくするような。これはチャンスだと思うんですね。今回総合教育会議ができて、新しい大綱を作って、今までと同じでは話にならないので、「ここから教育は変わるんだ。もっともっと面白くなっていくんだ。」というようなアピールというか、広報をしてほしい。「楽しい教育が始まるんだ。もっともっと子どもたちと世界が近くなって、世界に飛び込んでいけるんだ。それがすぐ目の前にあるんだ。」ってというようなメッセージができれば、子どもも幸せだし、親も、そして地域も幸せかなあというふうに思います。ありがとうございました。

<飯泉知事>

田村委員さんからは、総合教育会議や挙県一致協議会、いろんな形で大綱を取りまとめるに当たって御意見を聞いているので、その手続きや開催の概要についても載せたらどうかということですので、参考資料として、これまでの開催について、何をやったのか、そうしたものをやはり記しておく必要があるんじゃないか、そうしないと、おざなりにあったものを、ぽんぽんと2回ぐらいで、いきなり大綱案が出たりする例も多いと思いますので、その特異性といったものを入れたらどうかとお話をいただきました。

それから、県民総ぐるみで対応するということで、県民参加の手法、こうした点があれば参加しやすいのではないかといただきましたので、これは少し工夫していれば、新しい基軸になると思います。特に学校・家庭・地域の三位一体の中では、それが不可欠となりますので、そうした点を是非入れ込んでもらえればと思います。

それから、うったてからいきますと、まず、1ページの所、教育行政推進の方向性で子ども、保護者、教職員の皆さんもわくわくする方向性、確かに2の所の基本方針に夢あふれると述べていますので、人材の育成にかかっちゃっているわけなんですけど、全体的に教育はそういうもんなんだと、

そういうものにしなければいけない、こうした点は貴重な御意見だと思いますので、これを入れ込んでいく必要があるのではないかと思います。

次に3ページの所、この個性を伸ばすところに当たると思うんですが、小学校では、確かに教科担任ではなく、クラス担任になるわけですね。そこについて、専科の先生が教えると子どもも興味が全く違って来るんじゃないかと、今ちょうど、小中一貫教育というのがどんどん出てくる中で、小中の一貫という観点入れていくのであれば、こうした点も入れてみてはどうかという御意見ですので、こうした点も斟酌をお願いします。

それから、その下にある「次代を生きるキャリア教育の推進」の所で、インターンシップを始め、職業体験教育をどんどん進めようということなんですが、保護者の皆さんから画一的すぎるんじゃないかと、今、ベンチャーをはじめ、若い人たちが起業してどんどん新しい仕事を、我々がやるICTはまさにそれということになるわけですし、そうした対応が無ければ、遅れるんじゃないかということですので、インターンシップあるいは、職場教育のあり方の所は、もう一ひねりあるんじゃないかというお話でした。

また、デュアル教育の所についても、具体的な事例を入れて頂きましたので、こうした点をどのように共有していくのか考えて頂ければと思います。

<西委員>

はい、よろしく申し上げます。この大綱案、いろいろ直したところを示していただいたんですけども。実は私は、こういうことを会社としてやっていて、ミッションビジョン的なところにこれが当たるのかなと、うちの経営企画室の人間にですね、「どう思う？」って見せたんですね。素直に感想とか何か意見があったら言ってみてくださいと。そしたらですね、そのまま読むと、「非常に大きな構えで書かれている。一口に教育と言ってもここまで網羅しなければいけないことに驚きました。」「私のレベルではよく分かりませんが、これだけのことができたならば素晴らしい徳島県になると思って、わくわくしました。」言葉的には非常によく出来ているし、網羅もされている。問題はここからで、成果とは何なのか。それから成果を出すための計画ですよ。というところに落ちていくと思うんです。これからが非常に大切なところ。じゃあ、これが成功したっていうのは、成果をどういう指標に設定するのか。そのための計画は？って。期間として平成30年までの4年間でしょ。じゃあ、1年の成果は何なのか、2年の成果は何なのか、そして最後の成果はどこらへんにしていくのか。といったところに恐らく落とし込んでいくと思うんですが、これからがもっと大変だなと。

前回、私が「もう少しこういうふうにしたらどうですか。」って言ったのは、「点と点を線にした方がいいですよ。」と。今ここで展開していく話というのは、知事が一番大きなリーダーシップを発揮して、これを推進していくと思われましても、教育委員会、これの枠を取り外せるわけですよ。で、いろんな県庁の人たちとやっていける。実はうちの会社としてですね、1～2週間を見ても県の方とすごくいろんなことをやっています、先週、私は金曜日に津田中学校で講演しました。その間に知事から、男女協働参画で表彰を受けました。明日は障がい者研修がうちの会社であったりとか、それから先日は徳島県の障がい者職業センターで、うちの人間が事例発表をさせていただいたりとか、あと、毎週のように「ふるさと応援し隊」というのにも、うちの社員さんがそういったところで貢献している。この1～2週間、すごく県の方と関わってやっている。これははっきり言って、貢献してるんですけども自分たちの仕事に役立っている部分が非常に多くて、

そこで気づいて、感じて、目の前の仕事に生かされると。

実は、我々の経営計画の中にも、貢献のことについていろいろ謳ってるんですよ。で、成果は何か。例えば、障がい者の雇用率を10年以内に6パーセント、現在、法定が2パーセントで3倍までしていきましょと。4パーセントはもう目の前に見えて、やってるんですね。だから、こういうものをミッションビジョンとして謳ったら、展開していくときに何を成果とするのか。どういう計画で、プロセスは？っていったところが非常に大変なところですけども。今うちの会社の取組みをこの1～2週間のお話させていただきましたけど、これ（大綱案）見てですね、ちょっと個人的にもあるいは会社的にもそういう専門知識無いなあというところも中にはあるんですけども、特に、5ページとか6ページに書かれている内容のことって、個人的にもうちの会社的にも一緒に取り組んでいけることが非常に多いなあって感じるとともに、じゃあ、「ふるさと応援し隊」ってこれにかませるんじゃないかなと。障がい者なるとかってやってることって、これにかませるんじゃないかな、そういった意味で、今、県の中でいろんなやられていることと、これとを結びつけてですね、一緒に展開するようになれば、職員の方々とか教育委員会の方々とかの負担もどんどん減っていくと思うんですよ。で、知事がリーダーシップを発揮してやるわけですから、そういうことって、たくさん可能になっていく訳なんで。これからいろんな展開するとき、県で今現在やっているところを、より成果を出すために教育大綱とマッチさせてやっていくことが、非常に負担も少なく、そして成果も出やすくなっていくのではないかと感じています。

<飯泉知事>

西委員さんからは、会社の経営者でありますので、成果の出し方ですね、それとマイルストーンをしっかりと、これは、三牧委員さんとも同じご指摘になるわけなんですけど、教育の枠を取っ払って、知事部局も含めて、総力でやっていくといった部分をはっきり示していくことによって、知事部局とのリンケージなんですね、この施策が絵に描いた餅でなくて、より具体的な実現可能なものになっていくといった点について、ご指摘をいただきましたので、このあたりもしっかりと、どのような形でやっていくのか、ただ単に4年間というわけでない、いま、PDCAサイクルが常に回りますので、そういったものをどういった形で書けるのか、そういうのを考えて頂ければと思います。

ちなみに、西さん、県といろいろあるということで、つい先般、西精工の皆さんには、ものづくり商談会で西さんまで一緒に行っていただきまして、ありがとうございました。

<西委員>

こちらこそお世話になりました。

<佐野教育長>

はい、それではお願いします。今、西委員の方からこれをいかに実践していくか、その結果を、と言ったときに私の方をチラチラ見られまして弱ったなと思ってまして、大変だなと思いながら、ただ、これを読んだときに改めて教育って多方面にわたって、いわゆる勉強だけではなくて人づくりそのものだなって改めて感じたところです。

今、実践していることを少し思いついたまま言いますと、1ページ目に「ベートーヴェン第九アジア初演の地である板東俘虜収容所における奇跡の交流」と書いてありますが、このあとドイツ館

に行きまして、今、ニーダーザクセンからプリンクシュトラーク職業学校から8人の生徒さんと3人の先生方が来られていて、ドイツの高校生が制作した天板を徳島科学技術高校の生徒が制作した銘板に載せて、板東俘虜収容所のこれまでのあり方を示したメモリアルプレートを設置に行くんですね。今、そういう交流もできているということ。それから、4ページの「全国屈指の光ブロードバンド云々」というところに、スーパーハイビジョン4K・8Kとありますが、これも先日、埋蔵文化財センターの20周年記念で、矢野銅鐸を4Kできれいに映像化しているものを、知事と一緒に見たわけですが、知事の話ではこれは日本で初めてではないかという話でした。そういう具現化しているものがここに書かれている、書かれたことが具現化している。あるいは、私も7月にドイツのニーダーザクセン、9月に台湾の新竹市に行きましたが、それぞれそこに科学技術高校、つるぎ高校も行って交流を進めるとなってますし、ご承知のように、徳島商業はカンボジアと交流をするなど、どんどんスピード感を持って進んでいるということでもあります。そうした中で、この大綱が5年後に古くなるころがきっと出てくる。しかし、普遍的なものもあるだろうと。その普遍的なものを拾い上げながら、また新たに書き込んでやっていく作業もいるのではないかと考えておまして、教育の中の普遍的なものに変化するもの、それを敏感に学校も感じ取っていかねばならないと思っております。

そして、何よりも教員として肝心なところは、ここにも書き込んでいただきましたが、6ページの「教職員の負担軽減と経営感覚の醸成」のところで「不断の業務改善による負担軽減を推進するとともに、教育予算が未来への先行投資であり、かつ、国民の税金によって支えられているとの認識のもと、社会の変化や動きに的確に対応した経営感覚・コスト意識の醸成を図る」とあります。このところは学校の先生方に呼びかけながら、一緒にやっていきたいと考えております。

それから、大変ありがたいなあと思っておりますのは、その次の「すべての子どもに均等な教育機会の提供」というところも書き込んでいただきましたし、奨学金のことも、8ページですが「とくしま回帰」の促進のところで、「奨学金返還支援制度を創設し、県内事業所等に一定期間就業した学生の奨学金の返還を支援する」と書き込んでいただきました。これはまさに知事部局と一体でないとやれないことかなと、学校としては力強い後援を頂いたと思っております、ともすれば学校の常識が社会の常識と違うという言われ方をしたり、学校が抱え込むというふうに言われたりもします。学校の教員の側からすれば一生懸命発信しよう、あるいは、みんなと一緒にやろうと思っても、その手法が分からないところもあります。そういった中で、この教育大綱を読んだときに、皆さんおっしゃいましたように、県民挙げて、県を挙げてやっているんだという応援歌になると思うし、応援歌にしていかなければならないと考えています。こういうことを考えながら、現場の皆さんと共に作っていくものかなと思っております。よくいろんな方面で書いていただいて、昨日も、四国の市町村教育委員会会議があったんですが、そこで少し徳島県の取組を話させていただきました。誇るべき内容もあるので、皆さんに応援いただいて頑張りたいと思います。

最後に、これを読みながらハタと気がついたのが、徳島からというより日本の教育について書いているんだなと感じました。以上です。

<飯泉知事>

今教育長さんからのお話の中で、学校の非常識、学校の常識は社会の非常識というのが、従来だったのですが、そうじゃなくて、学校の常識といわれた社会の非常識が、おそらく、これから、新たな教育であったり、知事部局を含めた行政全体の施策創造のヒントになるのではないかと、また、

前向きに捉えるというサジェスションをいただいたと思いますので、そうすることによって、現場の職員の皆さん方の苦勞を全体で共有して、それが逆に新たな施策に変わるということで、皆さん方も喜びに切り替えることができる。その成果は、子どもさん達も受け継ぐことができる。こうしたいい循環に結びつけていければなあとそのように考えるところであります。

<松重委員長>

この総合教育会議を振り返ってみますと、なぜこれができたかという、おそらく教育再生実行会議が第2次安倍内閣の一つの目玉として、第2次提言の中で教育改革の在り方という、この中で大綱を首長の下で立てなさいよという話だったと思います。今の議論の中で、教育というのは教育委員会が担当だということから、それを県全体、知事さんが入ることによって、そういう体制にするというのが非常に大きな意味合いだと思います。そういった面では、さきほどの意見があったように、教育委員会だけじゃなくて知事部局も、いろんな部局、商工労働観光部とかも関与するという視点だと思います。そういった面からすると教育を一部教職員、学校、関係者だけじゃなくて、地方創生にも関係し、地域の人そして県民全体が関与すると思います。そういう視点の中に捉えられるという面では非常に意義があるし、内容的にもそういったものが盛り込まれていると思います。

だんだんと内容が膨らんできて、また今回いろいろ注文が出てきていますので、さらにあると思うんですけど、一番最初の会議のときに予算の議論がありました。これから県の来年度予算を立てると思うんですけど、私の立場から言うのもおかしいんですが、教育に関するいろんな部局で関連するもの、それと一緒にやれるものがあれば知事の方でまとめていただいて、徳島県は地方創生を一つは教育という視点で予算化をするし、実際やるというのができれば非常に大きなインパクトになるのかなと。と言いますのは、教育予算が実は人件費がかなりウエイトが高く、これは一番最初の会議で提起したのですが、新しいことをやるための予算がどうしても必要です。それを工面するというのもあるんですけど、いろんな予算、施策でやられているのを教育という視点、人を育てるという視点で考えることが重要で、そういったものが一つの予算策定の在り方としてあるんじゃないかと思います。それが1点。

それから、徳島県の一つの特徴として、人材の材を財産の財、これは徳島の宝といいますかね、やはり人は宝なんですけど、それを作っていく、ないしはそれを育てるという意味での視点から、ちゃんと言葉の中にも入っているということだと思います。そういった面で、いろんな府県で大綱ができると思うんですけど、言葉の上からも徳島県の特徴を出せるのかなという気がします。

この中身で今改めて見ると、これは教育ですので、我々がその場を作る、支援をするという立場なんですけど、児童、生徒の視点がちょっと入ってないのかなと思われま。いろんな視点で書かないといけないと思うんですけど、ほんとに子どもたちがわくわくして、それがやれるような形に、がちょっと盛り込めてないのかなという気がします。

それに加えて、創業というかベンチャーという視点があります。これは今からの世の中が職業も含めて大きく変革し、今ある職業の何割かが5年後、10年後に無くなるという話もあります。そういったものに対して教育はどうあるべきか、そういった面からすると、学習というか学ぶということじゃなくて自分で修め、自分で考える、それからいわゆる「生きる力」をどう育成するかというのが非常に重要になると思います。そういったところを改めて整理すべきかなという気がします。既にその概念的なものは盛り込まれているんですけど、そういう言葉というか視点もあればなという気がします。未知の世界というか職業が変わる中でどう生きていくか、その中で自分で生きてい

く力、それから創業という視点を少しどこかで、例えば、9ページの②の下か、3ページの①のところか、そのあたりでちょっと盛り込めればなというふうに考えます。

さきほど西委員からもあったんですけど、こういったものは目標だけじゃなく指標といいますかね、数値化するのはなかなか難しいんですが、これもある程度考えないと理想論になってしまいますので、そのあたりをどこまでここで盛り込むかということになるかと思います。あんまり数値目標を明示すると、それが逆に足かせになりますので、教育はそういうふうに数値化できるものではないと思いますけど、ある程度のマイルストーンを、それをちゃんと検証していくことを、どこかで配慮する必要かなと。これは大綱ですので中長期的な視点だと思うんですけど、そういったものが数年後には風化しないように、そのあたりの配慮が必要かなという気がします。

それとですね、地域を挙げて教育を考える、学校、地域全体で取り組む姿勢が重要で、実は昨日私は沖縄の離島に行きましたが、そこでもやはり同じように地域をどう支えるか、介護の問題であるとかいろんな問題が、むしろここ以上に厳しい状態があります。そういった中で、地域が教育、子どもを育てるという視点をどう盛り込んでいくかというところがあります。

最後に、スポーツ関係のことが書いてあります。今まで、徳島の子は中高生は頑張ってるんですけど、大学生や社会人の有力選手は残ってなくて、なかなか、国体でもかなり悪い成績です。まず、大学の方でできる範囲で、子どもはスポーツ推薦制度を創設しました。ただ、それは大学までの話なので、やはりあと企業さんがトップアスリートを雇用して地域で、クラブチームでもいいんですけど、育てるような姿勢が必要かなと思います。我々としてはスタープロジェクト（STAR）というのを始めています。これは、四国大学トップアスリートリアリングというタイトルなんですけど、企業さんも含めていろんなCSR活動があると思うんですけど、教育、人を育てるという面での協力体制が不可欠です。また、その推進のコーディネートはどこかがやる必要があります、そのために必ずしも全て県の予算を使うわけではなくて、地域の予算、企業の予算を使う手もあると思います。そういったところも考えて、地域全体で教育を支えるというところを、もう一度明確化していただければと思います。以上です。

<飯泉知事>

まず、松重委員長さんからは、第1回目の議論でもあった、教育予算の話ですね。確かに人件費比率が8割、ともすると硬直化に見えるわけですが、今の御提案については、三牧委員さんからも西委員さんからもありましたが、教育の枠を取っ払って、いろいろな施策、どこがこれをやるのか。従来だったら教育委員会だけであったものが、知事部局の何々課でやる。そこが連携してやっていると、こうした点で、新しい地方創生もあるんで、教育からの地方創生っていうか、こうした観点で予算化をしたらどうだろうか。既にこの話というのは、今までの知事部局の中でもあった話で、例えば、観光だから商工労働観光部だけの予算だ、縦割り、そうじゃなくて、農産品のグリーンツーリズムなら農林水産部ね。体験学習これは教育委員会だ、例えば、観光予算といってもこれだけの予算がバラバラにあるので、これを一つにまとめることによって、まったく概念が変わってくる。という教育予算が増えるということにもなるわけですね。そうした新しい地方創生の元年予算ということに来年はなるわけですから、こういった点については、知事部局とも、今回は政策創造部が絡んでいるわけですから、教育の予算の中にそうしたものをともに共管という形で、両方にかけることによって、教育委員会が観光もやるんだねとか、現に福祉の体験とか、そうしたものは既にやっているわけですから、あるいは防災ですね、こうした点を是非、財政の方、経営戦略と

もリンケージする形で委員長さんも言われた新しい教育の予算というものの形を打ち立てていただきたいと思います。

それから、子ども目線、カギ括弧も入っていたわけですが、そうはいつでも、子どもの視点、皆さん方がいわれるわくわくする観点がちょっと足りないんじゃないかという点がありますので、せっかく子ども目線、カギ括弧まで入れておりますので、それがどういった点で反映をされているのか、そういった点はしっかりこの中にしたためていただければと思います。

それから、ベンチャーの話ですね、創業についてどういう風に考えているのか、従来教育の現場でもそうだったと思うのですが、我々の時代もそうですが、特に保護者の皆さんを含めて、寄らば大樹の陰ということで、一部上場のトップのところがでてくる、ベンチャーなんてほとんど出てこなかった。しかし今は創業の時代、新しいものがどんどん出るという中で、こうした価値概念といったもの、やはり教育の一番のポイントは出口なんですよ。出口をどうだして行くのかというのが、今回の人財の財になるわけですから、社会にどう貢献する人財をつくっていくのが一番の出口になってきますので、そうなると、従来昭和高度成長期のよらば大樹の陰という概念をやっぴりかえてチャレンジしていくんだと、そして、新しいものをつくりだしていくんだと、是非そうした点は入れ込んでいく必要があるんじゃないかとおもいます。

西委員から指摘のありましたマイルストーン、ここについても委員長さんからお話が出ました。教育の場合、なかなか、いつまでになにをというのではなく、場合によっては、長い目線も重要であるわけですが、やはり、これが絵に描いた餅じゃないんだということを教育現場あるいは、保護者の皆さん、地域の皆さん方がそうだと思っていただくためには、やはりマイルストーンの立て方に工夫が、教育ならではのマイルストーン、例えば、少し幅を持たせるということも、あ！なるほど、教育だからやはり中期的なシェア、こうした幅を持たせるということのも一つあるんじゃないかと思いますので、この機会に教育としてのマイルストーン、ならではのものを打ち立てていただければと思います。

また、離島の話から始まって、スポーツから企業としてどうか、人をどう育てていく、コーディネートの話もでたところでもありますので、そうした、最終ページの所に芸術・文化・スポーツとでてくるわけで、まさにこれは企業メセナーであって、あるいは、どのようにこうしたせっかく優秀な人財を抱えていくのか、これも重要な点となりますので、そういう地域社会として、これをどう支えていくのか、こうしたものを視点として入れるべきだと思いますので、そうじゃないと、せっかくこれをやっても最終の出口でこけてしまうということになってしまいます。そこまでしっかりとやっていってこそ、ようやく全体の風呂敷が閉じるということになりますので、今委員長さんがおっしゃっていただいた点については、しっかりとこの中に具現化していただきたいと思います。

まだ、本日は時間がありますので、何かありましたらお願いします。

<佐野教育長>

今のマイルストーンとか数値目標の件ですが、ご承知のように教育振興計画がありまして、今度、新しい振興計画は平成30年度から実施するわけですが、その書き込み具合もあるかなと思います。大綱の中にある程度のそういうものを書けるとしてもですね、なかなか書きにくいところがあるように感じております。ですから、振興計画は毎年見直しておりますので、その中でそういうものを書き込んでいったりですね、新しい手法の中に当然今後の振興計画が新たに盛り込まれる

ことになりますし、これを具現化する手法になると思います。そこに書き込むのも一つの手かなと思いますし、その中でより議論をしながら、教育委員会の成果を評価していただく会がありますので、それをまた持ち寄って、新たにここでも評価をしていただく。そういった段階を踏めば、細かなことを書き込まなくても少し難があるところを避けられるのかな、ということ聞きながら考えておりました。

<飯泉知事>

3の所の推進期間が寂しい、たった1行ということですので、先ほど教育の中でマイルストーンと申し上げたのは、そういう所がありますので、今教育長さんから出た振興計画との関わり、そうしたことも書けばいいんですね。そうしないと、あー絵に描いた餅ということになってしまいますので、振興計画というのでも足かせにするのでは無くて、教育振興計画を使う。我々としては、今回、教育の鴨居を超えて、教育振興計画はあくまで教育委員会の中で、教育をどうしていくのかがメインとなりますので、今回の教育大綱は決して教育の世界だけじゃ無い。教育を基軸として、徳島をどうしていくのか、そうした点を推進期間の所にもう少し書いてもいいんじゃないですかね。推進期間は4年間なんだけど、振興計画との今後の部局設定とかの関連をこの中に書いていくことによって、厚みが出てくる。振興計画との連携ができるということになりますので、教育委員会と政策創造の方でしていただければ、よろしくお願いします。

<三牧委員>

今の教育長さんの話と関連しますが、先日、四国の教育委員の会議で話題に出まして、さきほど田村委員さんからも出てましたが、他県の教育大綱はとてもシンプルなものでした。各県によって、教育大綱をどういうふう位置付けるか、考えるかということで、量がずいぶん違ってくると思います。他にも、教育振興計画の具体的なものと教育委員会以外の他の部局の施策を全部盛り込むような話があり、それは確実に決まったものかどうか分からないんですが、「そんな形になるから相当な量になると思います」という話をされていました。だから、教育大綱をどういうふうなものにするのかという考え方によって、ずいぶん違ってくると思うんですが、各委員さんからのお話にもあるように、これは、徳島県として教育に対する思い、姿勢、基本的な考え方を示すものなので、あまり細かなところまでいくと漏れが出たり、我々の意図するものとちょっとずれてくるようなところがあるのではないかなと思いますので、是非この推進期間の項目のところ、この大綱を今後4年の間、あるいは4年以降に向けて、何をどういった方法で検討・評価していくのかとか、どういった機会を持ってその過程を検証していくのかとか、そういったことを書いてくださるのがいいかなと思います。

<飯泉知事>

私もそう思いまして、普通考えると、上位計画的に教育振興計画がある。知事部局でいうと、新未来創造行動計画がここに入ってくる。私はそうじゃなくて、振興計画と行動計画をブリッジする上位の概念がこれ、それぞれを使って具現化をさらにしていく。そういった意味では、一番高いものなんだとしなければ、何の意味も無い。つまり、これを一つ見るだけで、徳島の教育の方向、あるいは、三牧委員さんがおっしゃっていただいたように、国の方向としても教育はこうあるべきだと、それを具現化するために純粋な教育部分は、振興計画が下部計画としてあって、知事部局の方につ

いては、下部計画として行動計画がある。もちろんその中には、様々な教育のもの、あるいは教育とのリンケージがそれぞれでてくる。教育振興計画の中には、知事部局とのリンケージが出てくるわけですから、その二つの上の上位概念として位置づける。そのように位置づけるのは、今のところは無いんだと思う。

先ほどの例が我々の一番最初のスタートの時の概念、つまり、教育振興計画をつくって定めるのだから、それをコピーすればいい。文部科学省もそれでもいいといっているんだから、47都道府県を並べたときに、振興計画コピーのもの、あるいは、教育振興計画あるいは県の行動計画などの下位計画、そういったところが、大半となってくる。本来これをつくる意味合いというのは、下位じゃなくて、それぞれをブリッジする上位の概念、徳島で教育といえば、これを見れば方向性が分かる。具体的な手法としては、振興計画、行動計画を見ればわかる。そこには詳しいマイルストーンが毎年記述されている。KPIの部分も書いてあるので、そういう形にすると、おそらく、西委員のいわれる各企業の皆さんから見ても行政ってあまいよね、やるのかやらないのかははっきりしないよねっていうところがはっきりしてくるんじゃないか、もちろんこの中にしっかりと書き込む部分は、書き込めばいいと思います。大体、教育としてのマイルストーンはこういう風にやる。そのあたり、是非、今いただいた点について、教育委員会と政策創造部でよく咀嚼していただく、徳島が今回打ち出すのは、今までどおりの振興計画だとかそんなもんじゃ無いんだと、委員長がおっしゃった原点になるんだと、日本の教育が変わるんだと、その原点をここから打ち出していこうと、その最初のチャレンジを徳島から、徳島の教育大綱は異次元のものとしていかないと、あれだけの多くの皆さん方から実際御意見をいただいたので、その辺はしっかりとよろしくお願いします。

<西委員>

もう1回、成果とか指標の話をさせていただくとですね、どうしても企業経営において成果って何かというと、業績みたいに思われるらしいんですけども、それを求めていったら、戦略って全く変わってくるんですね。売上げとか利益を求めたら、お客さん目線にならないというのがあって。結果、売上げや利益が付いてくるみたいな形で我々は経営をしてるんですけども。こういったところの指標とか数値目標とかいったところも、やっぱりですね、そこまでするかっていうところまでやらないとダメだと思います。見えてないものを見える化する。例えば、やられているかも知れませんか、校長先生を評価する制度がありますか。おそらく無い。ありますか。

<佐野教育長>

それはあります。

<西委員>

あるんですか、ごめんなさい。じゃあそれをオープンにしていますか。いろんな意味でオープンにできるところまでオープンにしてだとか、あと、教職員の負担軽減とありますけど、どこまで、メンタルヘルスだとかいったところまで関わっていますかとか、それが原因で休んでいる人が今こうこうだけど、せめて5パーセント下げているじゃないかとか、いろんなところを突っ込んでいけば、数値目標って立てていけると思うんですよね。初めから、教育といったものに対して数値目標立てにくいじゃないか、マイルストーン見えにくいって言って、それが潜在的に入っていれば、なかなかそこまでいくのって非常に難しいと思うんですよね。だから、我々が立てているのは、売上

げ、利益の数値目標なんかほとんど全くというほど立ててないです。結果としてそれがあるだけで。じゃあ、お客さん本位の数値目標ってどこにあるのかって言ったら、それはお客さんによって違うわけで、それをどんどん突っ込んでいけば、逆に、数値目標が上がってくることに對してやりがいだとか、良かったねといった満足感とかが高まってくるので。そういったものは、いろんなところを突っ込んでいったり、深掘りして見えないものを見えるようにして、数値目標あるいは指標にしていった方がいいんじゃないかなという気がします。例えば、うちの会社の中でも総務なんて数値目標を付けにくいんですよ。それでも、あった方が結果的にやりがいが出てくるし、わくわく感、達成したかどうかで、5合目まで来てマイルストーンが見えなければ、やっぱりやりがいだとか、うまくいったねと言ったところで、非常に見えにくくなってくるんでね。なんとか深掘りして、いろいろ調べたり分析とかして、できるものはやってもらいたいなと思っています。

<田村委員>

数値目標に関しては、ちょっと懸念するところがあります。会社だったら単純に数値目標に向かっていけばいいのですが、県各組織の連携や教育となるとなかなか難しいと思うので、数値の目標だけが一人歩きしてしまわないかと心配です。

あともう一つ、9ページの最後「世界に輝く「あわ文化」の創造・発信」のところなんですが、文化的なことって徳島はたくさんあるのに、3行しかないなあって。また内容も「徳島ならではの「文化プログラム」を創造し、東京オリンピック、パラリンピックを見据え世界に向け発信する」って阿波踊りのことかなと思うんですが、せっかく文化的な徳島で、藍もありますし、工芸的なものもありますし、浄瑠璃とかしじらとかもあるので、もう少し文化財産のことに触れていただいた方がいいのかなと思ってしまいました。

<西委員>

これってわかりやすく、うちの会社でも、こういうのを作っていると最後疲れてきちゃうんですよ。理解するとですよ。頑張ってきて、最後ちょっと疲れてきちゃう感があるんで。そう思います。

<飯泉知事>

今のは、おっしゃるとおりなんで、もともとは、取り組むべき課題の所で阿波藍が出てくるんだけど、二度の国民文化祭もやったし、4代モチーフもあるわけだし、このあたりしっかりともう少し、スポーツと同じ量とはいわないけど、同じくらいしっかりと、スポーツよりも実績は上がっているわけだから、スポーツは国体でも、そういった点でもスポーツを超えるぐらいの整理をそれはあるわけですね。

次に数値目標の部分では、ここに個別具体的に書くよりは、逆に教育振興計画と県の行動計画を下位計画に位置づけることによって、具体的に書かれているので、その中で、このみのもの、両方に共通するもの、あるいは、次の教育振興計画改定の時に参考にしなければならない。そうしたことは、4年間に拘わらず書けばいいと私は思う。つまり未来志向、次は行動計画を、行動計画も毎年更新してますから、振興計画も変えよう、そのときの種本がここにある。つまりこれが理念なんだということを位置づければいい。そういう意味で、三牧委員さんが言っていたいた推進期間の分どういうものなんだ、マイルストーンはどう考えるんだをここに書けばいい。

<西委員>

もう1回いいですか、言ってることが誤解されたら困るので。わくわくするから数値目標で、成果は成果として絶対出さないといけないので。例えば、サービス業で、数値目標は売上げじゃないよね、利益じゃないよねっていったときに、何かといたら、お客さんの笑顔の数とか、笑顔の数ってわかりにくいよね、じゃあ、それをもうちょっと深掘りしたら何になるかなといったところでやっていけば、もっとわくわくしたようなものが、数値にはならなくても、成果とは何かというのが出てくるんじゃないかなと思うんですよね。それでも、教育委員会とか県の職員の方、教育現場の方が数値に縛られてとなると、ほんとに逆効果になると思うので、それを考えることが大切だと思うんですよね。それって一体どういうふうになるんだろうなっていったところ。ただ、あんまりここで「こういう数値目標だよ」って渡すよりも、現場の人がそれをもらって、「じゃあ、僕たちの現場で、数値とかあるいは成果として考えたらこういうことにならないかな」って、やっぱりここで与えてあげるよりも考えさせて何か出してくる方が、もっとわくわく感が出ると思いますけどね。

<飯泉知事>

おっしゃるとおり、ここではそういったヒントをつくる。具体的なものは下位計画二つでしっかり見ていけば、自動的に成果が、新未来創造行動計画は毎年更新、推進計画も毎年やっていける。一番のかなめをここに、それと二つの計画の関わりを入れることで、教育らしいマイルストーンができる。

<松重委員長>

細かい点で2点。あわ文化の話が出てました、これ短すぎると。もし付け加えるとしたら、最近のマチ・アソビとかの新しい文化、そういうところも触れてほしい。それから、京都もそうです、奈良もそうなんですけど、検定をやってますね。それを通して地域を知る。それから人が来る。それで「阿波検定（仮称）」の創設も考えてはいかがでしょうか。それには、そういう新しい動きも付け加えてほしい。

それから、これは全く別なんですけども、上位規定っていうか、非常に大きな話になってきてるんですけど、これだけのものを情報発信するにはそれだけの責任もあるし、努力しようとしなないといけないんですね。そういったところでやるなら、いろんな学校へ行くと「知徳体」が校訓としてありますね。ところが、その「徳」という言葉ないしは「知」「体」という言葉が入っている県はないんですね。「徳」といえば徳島だけ。それもうまくキャッチコピーとして、「教育の3本柱の中核をなす徳島県」とかね、そういったアイデアもどこかで考えていただければと思います。

<飯泉知事>

大綱の趣旨のあたりのリレーの中に、教育のあり方のあたりを充実させて、憲法だとか条例の中の全文みたいな位置づけで独立させると、形としては、あまり頭でっかちとならなくて、それを受けて趣旨が出てくるという形にすれば、委員長がおっしゃってくれた点は高邁に書ける。そこが徳島らしさなんだと、そうしないと、国が出してきた標準条例をみんなが、金太郎飴みたいにつくるようになってしまうから、そもそも、国から言ってきたのは、教育振興計画べたでいいと、場合に

よってはね、選択肢の一つとしては、当たり前だけど、そうすると、振興計画が下位計画でもなんらおかしいものではない。逆に新未来行動計画を下位にすることは、私が決めれば問題ない。やはりこうした今回初めてのもの、国としても大きく舵を切って教育大綱をつくろう。知事部局も併せてやっていく。そうした新次元のものを徳島から打ち出していくという形で、取りまとめていこうと考えておりますので、教育委員会、政策創造部については、そういった点を踏まえて最終の深掘りをしていっていただきたい。

本日は、積極的に御提言をいただき、さらに深掘りができそうになってまいりましたし、曖昧な感じであった、振興計画との関わり、あるいは新未来行動計画との関わりとか、あるいはマイルストーンをどうしていくとかの形がハッキリと見えて参りましたので、ありがとうございました。我々も最終成案に向けてさらに詰めていきたいと考えておりますので、引き続きよろしくお願ひします。本日は、ありがとうございました。

以 上